令和５年度第１回久御山町総合教育会議　会議録

招集年月日　　令和６年２月２日
招集の場所　　久御山町役場庁舎４階　入札室
開　　会　　令和６年２月２日　午後２時開会　宣告
出 席 委 員　　信　貴　康　孝
　　内　田　智　子
　　寺　井　恵太郎
　　豊　田　美　幸
　　阿　部　拓　児
　　田　口　賀　彦
職務のため出席した者の職氏名
　　総　務　部　長　　森　山　公　雄
　　民　生　部　長　　西　野　石　一
　　教　育　次　長　　中　務　一　弘
　　総　務　課　長　　神　園　哲　也
　　子育て支援課長　　佐　野　美　奈
　　学 校 教 育 課 長　　前　山　雅　宏
　　生涯学習応援課長　　星　野　佳　史
　　学校教育課主事　　迫　畑　美　沙

議題
（１）久御山町の教育課題について
（２）意見交換

会議の経過

１　開会
〇信貴町長
・本日は令和５年度第１回目の総合教育会議である。
・昨年４月にこども家庭庁が発足され、「こどもまんなか社会」を実現するために、取組を推進していくにあたり、久御山町の教育課題についてを議題としている。
・皆様の忌憚のない御意見を頂戴したい。

〇内田教育長
・教育委員会は地域の力を結集した教育の推進、また人と人がふれあい尊重しあう心をはぐくむことを基本理念とした、誰もが安心して教育を受けられる町を目指し、取組を進めているところである。
・学校教育では、久御山の子どもたちが自発的に学び、自らの個性・能力を伸ばし、豊かな心を持ち、社会と人とつながった自己実現を目指すことができる自立した人間

が育つことを目指している。そのために様々な施策に取り組んでいる。
・子どもたちの周りの複合的な要因が重なり合い、不登校や問題行動など様々な形で現れている。
・12 月に「こども大綱」が策定された。心身の状況、置かれている環境に関わらず等しくその権利の擁護が図られ、身体的・精神的・社会的に幸せな状態で生活を送る社会、すなわち「こどもまんなか社会」を目指すことが示されている。
・子どもたちが誰一人取り残されることなく人生を開拓する力を身につけるためには、子どもを軸としてその時期に応じた支援を系統的に行うこと、様々な機関が連携し、包括的に支援をすることが大切である。
・本日は、本町の子どもたちが抱える様々な現状・課題について、そして子どもたちが自己実現を目指すためにはどのような支援や体制が必要か、皆様の御意見をいただき、教育行政に活かしてまいりたい。

２　議題
（１）久御山町の教育課題について
〇前山学校教育課長
・久御山町の児童生徒の大きな課題の１つに、不登校がある。
・小学校は平成 30 年度から、中学校は令和２年度から右上がり傾向にある。
・全国、山城管内においても久御山町は出現率が高い。
・久御山町の不登校の要因は大きく２つあり、本人に係るもの、家庭に係る状況がきっかけとなっている。
・本町の子どもたちの取り巻く現状について、ひとり親世帯の推移は京都府・全国と比較しても高い水準にある。就学援助率を見ても、府内でも困窮率が高い状況にある。
・令和２年度の３歳児健診の受診率は 90％に留まっている。また、児童虐待の相談件数は年々増加傾向にある。
・子育ての悩みや不安のアンケートについて、子どもに関して、就学前児童を持つ保護者は「子どものしつけ」と答えている人が多いが、小学校に進むと「子どもの教育や教育費」、「友達つきあい」が多くなっている。保護者に関しては、「子どもを叱りすぎているような気がする」が多い。
・入学時のアンケートでは、「子どもの良いところを褒める」と回答した保護者が 99％となっており、色々な場面で褒めることの大切さを啓発していたものが結果となって現れている。
・３割程度の保護者はテレビの視聴時間を制限していない。
・言葉遊びや数遊びなどの経験が少ないことから、言語力や思考力を育てるような遊びにはふれていない。また、はさみやのりを使った紙工作などの経験が浅く、手先の器用さや集中力を養う遊びをしていないのではないかということが読み取れる。
・子どもの状況について、「学校に行くのは楽しくいか」との問いについて小学校６年生では全国と比較して「楽しくない」と答えている回答が多いが、中学３年生では「楽しい」との回答が多く、逆転している。
・勉強について、「分からない」「好きでない」と答える児童生徒が多く、将来の夢や

目標を持っていないと答える児童生徒も全国と比較すると多い。
・課題解消に向け、学校での施策と学校外での施策を見てみると、学校外では「土曜塾プラス」や「ゆめ☆スタ」を実施しているものの、特定の生徒をターゲットとした施策はこれからな部分が多い。
・子育て支援課が中心となり、今年度から実施されている「はぐくみ定期便」について、３か月から満１歳までの子どもがいる家庭に対し、訪問支援員が育児用品を届けるとともに、家庭の状況の聞き取りや相談に乗るなどのプッシュ型支援を含め、くみやま子育て応援支援センター「はぐくみ」を中心に妊産婦から子育て世代に対して、様々な施策を実施しているところである。
・教育委員会ではこども園の新設、保護者負担軽減施策、久御山学園の取組でもある園小中一貫教育、学校運営協議会等の施策を実施している。
・国においても令和３年 12 月に「こども政策の新たな推進体制に関する基本方針」を閣議決定しており、教育・福祉・保健・医療・雇用等に関する機関や団体が密接にネットワークを形成するとし、それぞれの単体ではなく連携した支援が必要であることとされている。
・令和５年 12 月 22 日にこども大綱が策定され、全ての子どもや若者が身体的・精神的・社会的に幸せな生活を送ることができる「こどもまんなか社会」の実現を掲げ、ライフステージに応じて切れ目ない支援をすることが示されており、各省庁が幅広い子ども施策を総合的に推進するために、連携して取り組むこととなっている。
・町においても、町全体で「こどもまんなか社会」に取り組んでいくために、協議をお願いしたい。

（２）意見交換
〇寺井委員
・教育委員の他、民生委員もしているので、いろんな人の家を訪問する。一部の地域は孤立している保護者もおられ、孤独感等をひしひしと感じる。世帯数も多い。それが久御山町の最大の課題だと思う。

〇信貴町長
・ひとり親世帯が多いということか。

〇寺井委員
・想像以上に多い。孤独感を感じている。会話をするだけで、喜ぶ人もおられる。
・実際に民生児童委員をやっていなかったら分からなかった。反対に訪問すると嫌がられる家庭もある。

〇阿部委員
・不登校児童生徒の数は、全国的に上昇している中で、久御山町はグンと伸びている。令和２年度に増えたのは新型コロナが影響しているのか。

〇前山学校教育課長
・新型コロナも１つの要因と考えられる。

〇阿部委員
・不登校での本人に係る状況として、病気と拒否があるが、本人が拒否している理由を解きほぐす必要がある。
・子どもは色々なものが複合的に絡み合ってしまったものに対して解きほぐすことができないため、「行きたくない」という気持ちになるのでは。
・国語、算数を好きでない数値が高い。概念的なものも含まれるようになってきている。分からなくて当たり前なところがある。
・学力によるクラス分けは、今はできないかもしれないが、学年を戻してやるということを積極的にしていかないとしんどいと思う子が出てくると思う。
・町が実施しているゆめ☆スタ、土曜塾プラスがあるが、あくまで時間外での話。それを学校の時間内でやらないと効果がない。
・一元教育の限界がある。子どもたちの多様性を認める必要があるように感じる。

〇内田教育長
・その話については、次の次の学習指導要領を作る上で今議論されているところである。10 年～15 年で今の形から変わっていくかもしれない。

〇田口委員
・不登校の割合が相変わらず高い。
・１つの原因としては家庭環境のことが大きいと思う。学校に来にくい子になるについて、家庭事情が非常に厳しい子が多い。
・就学援助率にしても割合が高い。以前は、非常に厳しい状況の中、働いている保護者もおられたが、子どもは元気に学校へ来て友達と話すのを楽しみにしていた。今は家に帰ればテレビがあり、それに飽きたら YouTube がある。電話にしろ、いつでも自由に連絡を取れる手段がある。子どもは自由な中で、物があふれていて困っているし、親もそれをどう選択させていくかが分からない。親をどうやって子育てに向き合わせるかが課題ではないか。
・はぐくみでは赤ちゃんがいる家庭におむつを運んだり、時間を取って話を聞いたりとそういうことをしている。そんなことをやっている人をたくさん増やして、マンツーマンではないけれど、３～４人ほどの親身になってあげられる人がいれば、保護者も子も落ち着くと思う。
・しつけといって怒鳴っている親がいると思うが、そういう人にしつけとはこういうことである、と教えることが大事である。叱り方が分からない人が多いと思う。そういった人の相談を受けられるようにする。話を聞いてあげることが大事。そんな人を雇っていくのにお金を使う方がいいのではないか。
・むやみやたらとお金をばらまいても違うものに化けることがある。保護者本人がほしいものに化けてしまう。その日のご飯もない、水道も止められている、それなのに

使ってしまう。使い方が分からないので、教えることが必要になる。親身になってもらえる人を行政で整えられたら、と思う。

〇豊田委員
・学校教育に関して、今までのやり方には限界があるというのを感じる。
・今までできなかった学びのスタイルというのが大きなことに取り組むチャンスになると思う。
・これまでの授業スタイルも合理的だと思うが、自発的なスタイルにつながりにくいと感じる。フリースクールのような円で囲んで、対話形式で行う授業もいいのではないか。
・学ぶスタイルは変わってきている。タブレット端末の導入もその一端。個々の伸びしろ、伸びる時期は異なる。本人の中で「伸びた」と思っていても全体で数値化されると諦めてしまう子もいる。個々の伸びしろに合わせた対応ができればいいと思う。
・学びの部分は合理化してもいいと思う。学ぶ喜びを追求できるように先生の負担を減らす、ゆとりの時間を持ってもらう、そういった仕組みを作っていくことはできると思う。
・合理的にしてはいけないものとして、家庭の教育力がある。一般的には学力が高いところが、教育力が高いというが、問題が起きた時にどう乗り越えるかというところに教育力の本当の姿があると思う。まず取り組めるものとして、学校と保護者が何かあった時に、こういう姿になろう・自分にできることがあるんじゃないかと考えること。共通の思い・認識を持っておくことが大事。
・PTA 活動を当初は嫌だと思っていた保護者の方も、実際にやってみて普段関わることのない人たちと関われて勉強になったし良かったと言う声があった。
・よく見るということは手間暇かかるが、その子の持っているものを育てる、教育することが大事なのではないか。今は、保護者がそれをうまくできない時代で教育委員会や学校が後押しをしているような状況に思う。

〇内田教育長
・話を聞かせてもらってのことだが、子どもはどこで育つかは選べない。保護者の子ども観であったり、保護者が子どもをどのように育てたらいいのかという不安において、そこにどのようにアウトリーチ型支援ができるのか、教育あるいは行政ができるのではないのかと感じた。
・資料にあったが、町からの支援がかなり手厚い部分とそうでない部分がある。就学前からの長時間のテレビ視聴が続いていることは、はさみを使ったり言葉遊びをしたりするクリエイティブな発想の機会を失っているのではないか。それをどのように補充するか。こども園ではそれに気をつけていただいているが、こども園に通園しない子もいるのが現状。

〇田口委員
・３歳児健診を受けている子は 90％くらいか。残りの方が問題だと思う。その子たち

が何かしらを持っていると思うが、受けていない子の保護者に対してのアプローチは。

〇佐野子育て支援課長
・放っておくというのではなく、別の機会に役場へ来ていただいて話を伺ったり、またはあいあいホールに来ていただいて保健師に話を聞いてもらうことをしている。久御山町に住所を置いていないケースもあるが、そういうケースを除いては面談等で確認をしている。

〇田口委員
・ほぼ 100％面談できているということか。

〇佐野子育て支援課長
・そのとおり。

〇信貴町長
・面談の傾向はどのようなものか。

〇佐野子育て支援課長
・３歳児健診に来られている方にも言えることだが、全ての人が健診時に心を開いて話すわけではないように感じている。はぐくみ定期便においてもできるだけ同じ支援員が毎月行ってもらって、毎月会う中で話をしたりするが、心を開きにくい方や、子育てを不安だと思っていない方もおられる。こちらが見ていて不安だと思っていても、困っていないケースの場合、アプローチが難しい。子が大きくなった時に保健師とのつながりが薄くなってどうなっていくかという点が心配である。

〇内田教育長
・学校につながる点では、３歳児健診に来られなかった等の情報は受け取ることがないので、そういうケースが積み重なると、もしかしたらリスクが高い家庭なのではないかと気をつけて見ることができる。

〇豊田委員
・助けてもらう側がその状態だときりがない。お互いに支え合うという実感を、自分でもできることがあるという力を養うことが、前に向かったアクションとしては大事なのではないか。
・ひとり親家庭でやりがいなど人に喜んでもらえる実感を持って働いている家庭は、疲弊も違うと思う。今後女性の働き方に対して、どういう施策になっていくか分からないが、もう一度スキルを磨くチャンスを与えてもらうとか。社会に支えてもらっているばかりではないという感覚を持つことがアクションとしてはいいのではないか。
・同世代の子どもたちが、個々の能力を伸ばそうとしていて、ライバルかもしれないが、自分たちしかいなくなるということを知る必要がある。みんなでいいものを作ろ

うという共存を知るべき。久御山中学校では行事になるとみんな頑張る、普段はなかなか来れないが行事の時だけ来る子もいる。優しい子が多い。一緒にやっていこうという気運の中に、それぞれの良いところを伸ばす方向に動けば、いいのではと思う。コンパクトだからこそ顕著になっている。

〇信貴町長
・今出てきた孤独感や、ひとり親家庭が多い点、学校現場が一律的なものであるに限界があること、コミュニケーションを増やすための人員増等、様々な課題が出ているが、具体的な取組があれば御意見いただきたい。

〇寺井委員
・ひとり親世帯が多いというところで、いろんな不安がある。幸せな精神状態であっても、そういうことがある。
・以前は、他所の子どもでも叱る時は叱る、褒める時は褒めるといったことがあった。地域の中での交流があったからこそ、地域の中で子どもを育てるという意識があった。今はそれが薄れている。
・久御山町は保護者負担軽減事業も行っており、大変手厚い。後はソフト面での事業を広げてほしい。
・一番大事なのは大人の姿勢。大人の生の声は伝わりにくくなっている。そういう場を設ける必要がある。
・まちづくりセンターや中央公園の話も進んできている。町外の他所の施設に行かなくても町民が集まれるような施設の環境・雰囲気を真摯に考える必要がある。

〇信貴町長
・まちづくりセンターや中央公園は建設に着手していく。全世代が活躍できるように整備を進めている。
・コロナ禍で思い通りにいかないこともあったが、まちのがっこうやクロスピア市等にしても、様々な方が主体となって仕掛けを考えてくださった。
・今は地域のコミュケーション力等をいかに戻していくかが先決。はぐくみ定期便等絆の再構築事業は今年度は作っているが、３年続けてみようと思っている。そういったものを活用していただく、また今も活用していただいている地域がある。ラジオ体操や子どもたちの小さな祭で活用している。人が集まって色々なことをしようと動いている。

〇森山総務部長
・現在 20 件ほど挙がっている。補正予算にも組んで、30 件近くある。

〇信貴町長
・数だけ聞いていると、求めておられる方が多い。手間がかかってもやろうと思っておられる方もいる。まず、コロナ禍前の状況に戻して、今ある課題をどう解決してい

くかが成り立っていくと思う。

〇阿部委員
・画一的な学校は当たり前で、近代の学校教育は規律化された国民を生み出すために作ったものだが、学校と軍隊は直結していないものの、画一化的で規律化された思想のもとで作られている。
・一方で現代は、ダイバーシティーの考えが重要で、２択から３択以上に幅広くなっていることが常識となっている。多種多様で伸びるタイミングも異なる。この考え方が浸透している。
・その上で、学校教育で必要なのはインクルーシブであること。ダイバーシティーでインクルーシブであるものを作ること。ダイバーシティーだけど、全員を受け入れるよ、ということが学校の理想。
・それに対し、具体的にどうするか、の問いに答えが出せないのが現状。全体として必要となるのは我々自身が正解を持っていない方がいいのではないかということ。町の取り巻く状況やアンケート用紙を見ると、「これが正解」というのが透けて見える。
・アンケートの質問の中に、「学力は将来の役に立つか」という項目があるが、これは「学力は役立つものだ」ということを暗に示しているようなもの。役立つものではなくて、豊かにするものではないか。
・暗黙の内に持っている正解を一旦ゼロベースにしないと、進まないのではないか。あくまで定点観測だと思うが、それでもこれが正解という観点は持たない方が良いと思う。

〇田口委員
・アンケートを見ていて、確かにそうだなと感じた。もっと全体をとらえるような質問の方が子どもたちも答えやすいのではないかと思う。

〇豊田委員
・施策は何のためにやっているのか、あやふやになってしまうと、やった甲斐がないとか、そういう風になるのではないか。
・概念がしっかりしていれば、同じ方向に向いて進むのではないか。しつけに対しても同じ。何のためにしつけるのかがあやふやになると足並みが揃わなくなる。着地点が異なると変わってしまうこともある。
・現場に行ってその人たちの気持ちを知ることも大事。
・それぞれの生きがい、喜びを考えながら、それぞれ違う境遇の中でもみんなが幸せだなと思って生きていくことが民主主義になる。みんな同じ生活になるなら社会主義を目指しているのかと思う。教育は何を目指しているのかということを共有する必要がある。

〇内田教育長
・今言われているウェルビーイングという考え方が大事にされている。

・生活困窮世帯であっても教育力や志が強かったり、環境が整っていれば貧困の連鎖から抜け出せる。自立した生活を送ることができる。そういったケースがあるが、価値観の共有ができないことがあり貧困が連鎖している。自己肯定感の低さの中で生きている人たちが多くいる。
・子どもたちは生まれ育った環境にとらわれず、自分の人生を豊かに生きてほしいと思うので、行政で支援できること、困っている子どもたちを見つけることが大事。そこで教育環境を整えることで、自己肯定感だったり学習意欲だったり学びを諦めることのない、人生が描けるのではないか。
・画一的なものではなく多様性の中でどんな風に生きていくかは子ども次第。豊かに自分に自信を持って生きている、それが大事である。久御山の子はそうであってほしい。

〇信貴町長
・時代は変化している。コロナ禍もその１つ。今後教育現場がどのようになっていくのか、教育長が言っている方針が出てきているのだろうと思う。
・子ども一人ひとりが信念を持って人生を切り開けるかが重要。そういう風に持っていける子どもたちが育つ。
・今後の課題や本町特有の課題をも鑑みながら、切望するような子どもの姿をどのように輩出していくかになっていくと思う。
・この機会に限らず、御意見等伺いたい。

〇豊田委員
・学校の外の取組として、地域特有の取組としてまなび塾があるが、だんだん減ってきている。
・補正予算も組んで活発化しているが、まなび塾は地域に特化している。何かそれが子どもの居場所づくりに関わってくる可能性はあるか。

〇信貴町長
・統計的にまとまっては出てきていない状況。
・親子でのコミュニケーションを取る、大人同士のコミュニケーションがある。今後検証してみていく必要がある。
・事業、効果はお知らせしていく予定。

〇豊田委員
・いろんなことを単発的に実施というか、そういう検証をしている段階ということか。

〇信貴町長
・コロナ禍もあり、何もできなかった。人と人が何かしようか等失われた地域コミュニティみたいなものを人と人が会うことで、地域コミュニティが再構築していく途中

であると考えている。

〇豊田委員
・不登校の親御さんたちが集う機会があるか。４～５人くらいで集まれるような、そういった仕組みを作るのはどうか。

〇内田教育長
・ゆうホールの「ゆうゆう広場」でそういうニーズがあるか確認をしている。相談会やコミュニティを作っていくというのは手探りの状況。
・まなび塾は地域的なもの。今後、新しい子どもの居場所は必要だと言われている。アプローチが必要。豊田委員が言われた問題意識は今後考えてまいりたい。

（３）その他
〇信貴町長
・少子化の関係でコロナ禍を迎えたこともあり、令和４年度で 82 名の出生数。５～６年前と比べると非常に少ない。まもなく就学する年齢になる。少人数が学校に入学し、それぞれ校区ごとに就学するとすればどんな形になっていくか、目の前にきている課題である。
・３校区とも今後増えるということもないのではないかという議論も必要ではないかと議会でも質問されている。それぞれ３校区がどのようになっていくのか、施設面でも課題がある。皆さんにも御念頭においていただきたい。

午後３時 50 分　閉会